

# 古代エジプト聖刻文字の書字方向： 一般統字論構築の一助として

永井正勝（日本学術振興会特別研究員/筑波大学大学院）

キーワード：文字学、文字論、統字論、書字方向、文字の向き、  
聖刻文字、ヒエログリフ

## 1 序

西田龍雄は文字を対象とする言語学の分野を文字学と呼び、その中核に統字論を設定している（西田 1986：220, 241）<sup>1</sup>。西田のいう統字論は文字

---

<sup>1</sup> 西田の用語では言語と文字に関する総合的・一般的な研究分野が文字学で、日本語の文字はどうあるべきかなど、個別言語の文字について扱う研究分野が文字論となる。このような西田の文字学には字形に関する形式的な側面ばかりではなく、文字の言語的機能の研究も含まれる（河野・西田 1995：29-30）。それに対して河野六郎は文字の言語的機能を扱う領域を文字論と呼び、文字論を字形の研究に対置させている（河野 1977：4）。亀井他（1996：1344r, 1347l）や福盛・池田（2002：36-37）も、文字の言語的機能を扱う分野を文字論と呼び、これを文字の形式面を扱う文字学と区別している。このように文字学・文字論という用語を巡る見解には相違が見られるが、ここで学史を整理すれば、河野、亀井他、福盛・池田が想定している文字論は西田の文字学に含まれる概念だといえるであろう。したがって西田が文字学の一部に統字論を位置づけているからといって、これが亀井他や福盛・池田で設定されている文字学の一部であるということにはならない。亀井他（1996）によれば文字論の中心的な課題は「言語の文字化の過程」（p. 1346r）、つまり「音声という聴覚映像から文字という視覚継承ヘウツス（移 写）過程」（p. 1347r）の探求にある。その際、表語・表音という文字の機能が第一に議論されることになるが、言語の線状性を文字がどのように示しているのかということ、つまり書字方向の研究も文字論の議論の対象となるであろう。

の配列を扱う分野のことであり、具体的には縦書きや横書きあるいは右書きや左書きというような書字方向が扱われる。言語学のなかで文字の研究は立ち遅れた分野であるといえるが、なかでも統字論の体系化を試みた研究は例が少ない。この状況は西田の造語である統字論を書字方向といい換えたところで変わるものではない。屋名池誠は「従来、日本語の書字方向は、正面切って研究されてきたことがない」(屋名池 2003: iii-iv)と指摘していたが、この指摘は日本語の文字にとどまらず、多くの文字に当てはまるものだと思われる<sup>2</sup>。本稿ではこのような状況を鑑み、筆者の専門とする古代エジプトの聖刻文字(ヒエログリフ)<sup>3</sup>を対象に、その統字論を概観してみようと思う。その際、議論を聖刻文字の個別研究に限定するのではなく、他の文字の統字論研究をも視野に入れたうえで「統字論の射程」と「統辞法の分類案」を前もって論じることにしたい。これらの部分はいわば一般統字論とも呼ぶべき議論の土台である<sup>4</sup>。この土台を踏まえたうえで、最後に聖刻文字に関する個別統字論として「聖刻文字の統字法とそれを規定する力学」を論じることにする。

## 2 統字論の射程

### 2.1 統字論とは何か

管見に及んだ限り、西田(1986)と犬飼(2002)が統字論の体系化を目指している。最初に西田の見解を確認する。

表意文字の場合は、部首をなす単体字形、あるいはそれらが組み合わさって構成される合体字形が基本単位となる。そして、それらの基本単位が線状的に配列される。[・・・途中省略・・・]このような基本単位の配列を、こ

<sup>2</sup> たとえば、文字表記に関する包括的な著作である Daniel & Bright(1996)においても、書字方向に関するまとまった記述は見られない。

<sup>3</sup> 聖刻文字(ヒエログリフ)はエジプト語を記す際に用いられた文字の1種であり(永井 2002:3-4)、紀元前3100年頃から紀元後4世紀まで使用された(河野他 2001:144)。

<sup>4</sup> とはいうものの、この一般統字論の部分は世界の文字のすべてを調査したうえで論じるものではない。一般統字論を考える際の叩き台として考えて頂きたい。

ここでは文字組織における統字法(シンタックス)としてとらえ、言語の類型における語順と同様に、文字の類型をたてるにあたっての大きな目安とした。 (西田 1986: 241 [原文では「シンタックス」が「統字論」のルビとなっているが、引用に際しては技術的な問題から上記の表記に改めた])

西田はこのように定義したうえで、縦書き横書き、右書き左書きなどの書字方向について論じている。つまり西田のいう統字論とは書字方向の研究を指す。一方、犬飼は次のように述べている。

音声言語では、言語単位の大きさにそって「音素論(音韻論とも) phonology」「形態論 morphology」「統語論(統辞論、構文論とも) syntax」の部門をたてる。これに対応して文字言語の研究に部門をたてるとすれば「字素論」「字態論」「統字論(または構字論)」となる。(犬飼 2002: 144)

この部分を読む限り、犬飼の見解は西田のものに近いように思われる。しかしながら犬飼の著作では、統字論の例として分かち書きによる文字列の文節(第 9 章)、補助符号と句読点(第 10 章)、書字方向と読み易さ(第 11 章)が述べられており、西田の統字論よりも広い範囲が扱われている。そこで、犬飼の別の解説を確認すると、

統字論の部門に属するものは、本書の第 9~11 章などで取り扱ったような、文字列の文節を含む文字列全体の様態に関する諸問題と、それらと文および文章との対応関係である。音声言語では一般に文法と称される分野から文章論にわたる分野に相当する。文字の本質的な機能は語を書くところにあり、文字列群が文または文章に対応する。文字列群を全体としてみると、そこにも言語としての構造がある。文字列群と文との対応関係、字を組み合わせる文字列にするときの規則、文字列を文節するための諸手段と規則、文字以外の要素を添加するときの規則、文字列の並べ方とその読みとり方、などである。本書では、これらを総称して「書記様態 writing system」と呼ぶことを提案する。(犬飼 2002: 149)

と述べられている。この部分を読むと、犬飼の考える統字論の射程が書記様態の研究にあるように思われる。そして、その書記様態研究の一部に、「文字列の並べ方」という書字方向研究が含まれているのであろう。

以上のような西田と犬飼の見解を踏まえたうえで、本稿で扱う統字論を定めると、本稿では主に西田の設定した統字論、つまり書字方向を扱うことにする。ただし、犬飼の提唱する書記様態のなかで「字を組み合わせて文字列にするときの規則」に関しては、本稿の統字論に含めたいと思う。

## 2.2 統字論の基本単位

西田の定義にしたがえば統字論は基本単位の配列を取り扱うことになる。では、基本単位とはどのようなものか。ここで参考になるのが福盛・池田(2002:37)の提唱する「字素・字節・字句」である。それによれば、「形状として1まとまりをなしているもの」が字節であり、また「漢字の部首やかなにおける濁点など」の「字節の構成要素」が字素で、「複数の字節で構成される文字列を1まとまりとして捉える場合」に使用されるのが字句となる。

次に、この字素・字節・字句という用語を採用したうえで、統字論の基本単位を考える。ラテン文字の1文字や漢字の1字は字節に相当する単位である。それらの文字においては字節の配列が線状性を示すことになるので、統字論の対象となる基本単位は字節となる。しかしながら基本単位=字節という考え方のみでは、一般統字論は成立し得ない。なぜなら、聖刻文字では字節を縦横に配列させることによって出来上がる複数の字節=字句が基本単位となり、線状性が示されるからである(詳細は3.2.1)。要約すれば、統字論の基本単位は字節の場合と字句の場合とが考えられることになる。そして、そのような基本単位の配列の仕方を取り扱うのが統字論となる。

## 2.3 統字論の周辺分野

上で述べたように、本稿で扱う統字論は字節あるいは字句を基本単位として、その配列の仕方を取り扱う。このことは、字素による字節形成が統字論の範囲外となることを示している。字素よる字節形成とは、例えば漢

字が偏と旁から構成されるというようなことを指す。西田(1986:222)はこれを「形字論」と呼び、統字論と区別している。本稿でも西田と同様に、基本単位の内部構造を論じる形字論を、統字論と区別して扱うことにする。

また本稿の統字論では字節そのものの書き順を対象としないことにする。字節の書き順は字節の形状と共に書字方向と関連する事項であると思われるが、本稿ではこれを扱わない。

加えて、書字方向と読字方向のズレも本稿では扱わないことにする。そのようなズレが顕著に見られるのは日本における漢文の訓読である。語彙も統語構造も中国語である漢文に対して、日本語の付属語を添えたり、返り点を打つなどの工夫を施して、日本人は漢文を日本語として読む努力をした。訓読における文字表記の諸相は、日本語の文字史の中では重要な位置を占めるものと思われるが、本稿ではこのようなものを扱わないことにする<sup>5</sup>。

また日本語には「しのばず」という地名を「不忍」と表記するような書字方向と読字方向のズレも存在している<sup>6</sup>。本稿ではこのようなズレを字句という単位内部での現象として捉え、統字論とは別の問題に位置づけておく。

以上、本節では統字論の周辺にありながらも本稿の統字論で扱わない事項をいくつか示した。これらの一部は犬飼のいう書記様態に含まれるものであり、文字研究における重要なテーマであるかもしれないが、考察は別の機会に譲ることにしたい。

---

<sup>5</sup> 日本における漢文の読み方を示した文字資料としては北大津遺跡出土の「音義木簡」が有名である。これらの木簡では大字の漢字の下にその読み方や意味が小字あるいは小字双行で記されている(沖森 2000:26-27)。本稿ではこのような小字双行なども扱わないことにする。

<sup>6</sup> 聖刻文字で書かれた中エジプト語でも似たようなズレが確認される。たとえば「王の息子」という表現は「息子/sa/ + 王/nesut/」という語順で発話されるが、表記上は「王/nesut/ + 息子/sa/」となる。このような倒置が生じるのは「王/nesut/」や「神/necher/」などの語彙に限られており、「王/nesut/」や「神/necher/」に敬意を払った表記であると考えられている(河野他 2001:152f)。

### 3 統字法の分類案

書字方向の分類を示したものに西田(1986)とGaur(1992)がある。最初に西田の分類案を確認すると、西田は統字法の大分類として横書き型と縦書き型の2つを立て、次に小分類として左書き、右書き、牛耕式を設定している。その結果、横書き型に(a)~(d)の4種類、縦書き型に(a)~(b)の2種類、合計6種類の統字法が提示され、それぞれの統字法に該当する文字が挙げられている(西田 1986: 242-243)。

一方のGaur(1992: 52-56)は大分類と小分類を立てることなく、(1)左から右への横書きで下に改行するもの、(2)左から右への横書きで上に改行するものなど、全部で14種類の統字法を設定している。しかしながらGaurによる統字法の分類には2つの問題点がある。1つは、それぞれの統字法の解説に具体例が示されていない点であり<sup>7</sup>、2つめは、1つの統字法のなかに右書きと左書きが共存している場合があることである<sup>8</sup>。

以上、西田とGaurの統字法の分類案を手短に紹介したが、両者の分類はいうまでもなく書字方向に関するものである。しかしながら本稿では、書字方向のみならず、「文字の配置法」と「文字の向き」という項目を新たに加えたうえで、統字法の分類案を考えることにする。以下、本稿で立てた分類案一覧を提示した後(3.1)、それぞれの分類項目に関する解説を述べる(3.2.1~3.2.3)。

#### 3.1 分類案一覧

文字の配置法(3.2.1)

- : 直列型
- : 升目内配置型
- : 自由配置型

<sup>7</sup> ただし巻末に A Dictionary of Script (Gaur 1992: 215-226) が付されている。だが、この Dictionary には pp. 54-55 で提示されていた統字法の(2)、(4)、(11)の例が掲載されていない。また pp. 54-55 で(6)と(7)に分割されている円環式の書字法が、Dictionary の p.215 では (circle) のみとなっている。

<sup>8</sup> Gaur (1992: 54-55) の (5)、(6)、(10)、(11)。

書字方向 (3.2.2)

: 横書き型

a: 同一方向式

1: 右から左に文字を書き、下に改行して、また右から左に文字を書く

2: 左から右に文字を書き、下に改行して、また左から右に文字を書く

b: 双方向式 (牛耕式)

1: 右から左に書く行と左から右に書く行とを交互に繰り返す (下に改行)

2: 左から右に書く行と右から左に書く行とを交互に繰り返す (下に改行)

1r: 右から左に書く行と左から右に書く行とを交互に繰り返す (上に改行)

2r: 左から右に書く行と右から左に書く行とを交互に繰り返す (上に改行)

c: 天地反転式 (倒立牛耕式)

1: 右から左に文字を書き、画面を 90 度回転させて、また右から左に文字を書く (下に改行: 1 行目の下に 2 行目を書く)

2: 左から右に文字を書き、画面を 90 度回転させて、また左から右に文字を書く (下に改行: 1 行目の下に 2 行目を書く)

1r: 右から左に文字を書き、画面を 90 度回転させて、また右から左に文字を書く (上に改行: 1 行目の上に 2 行目を書く)

2r: 左から右に文字を書き、画面を 90 度回転させて、また左から右に文字を書く (上に改行: 1 行目の上に 2 行目を書く)

d: ジグザグ式

1: 横 2 升を 1 組として、その組が上から下に連なり、右から左に改行

2: 横 2 升を 1 組として、その組が上から下に連なり、左から右に改行

: 縦書き型

a: 同一方向式

1: 上から下に文字を書き、右から左に改行

2: 上から下に文字を書き、左から右に改行

1r: 下から上に文字を書き、右から左に改行

2r: 下から上に文字を書き、左から右に改行




文字の向き (3.2.3)

$\alpha$ : 固定型

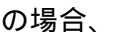
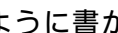

$\beta$ : 反転型

## 3.2 解説

### 3.2.1 文字の配置法

文字の配置法は犬飼のいう「字を組み合わせる文字列にする際の規則」(犬飼 2002: 149)に相当するものである。これには、: 直列型、: 升目内配置型、: 自由配置形の3分類を立てた。

の直列型はラテン文字や日本語の文字のように、字節を1列に配置するものである。日本語のかなの「きょ」のような字句の直線的な配置も直列型に含まれる。

の升目内配置型はエジプト聖刻文字等に見られる配置である<sup>9</sup>。エジプト聖刻文字の場合、 という字節の連続を横書きにする際、 のように書かれるのが普通である。つまり、書き手は升目を想定し、その升目に文字をバランスよく配置させながら表記していく<sup>10</sup>。この例では、 のそれぞれが1升となる<sup>11</sup>。升目の内部では字節が縦と横に配置されることになるが<sup>12</sup>、升目そのものが横方向に並べば横書き、縦方向に並べば縦書きとなる。



の自由配置型の代表はナシ象形文字(トンパ文字)である。ナシ象形文字では字節や字句を言語の線状とは違った順序で配置することが特徴となっている(河野他 2001: 684r)。

このような3分類を立てた場合、書字方向を示す単位がそれぞれの分類

<sup>9</sup> マヤ文字も升目を想定した表記を採用しており、1升到複数の字節が書かれることがある(河野他 2001: 934l)。またヒッタイト象形文字(ルイ象形文字)においても、字節の並び方は直線ではなく、縦横に配置されている。

<sup>10</sup> このようは字節配置を Englund (1988: X) は “square principle (正方形の原理)” と呼んでいる。

<sup>11</sup> これらの例では字句が升目を形成している。ただし聖刻文字では1升が1字節で形成されることもある。また横方向や縦方向の半角の升目もある。なお、ここでいう升目とは概念上のものであり、日本の原稿用紙のような表記された枠を意味するものではない。だがエジプトの壁画では、下書きの段階で升目を描いておいて、仕上げの段階で下書きを消すという手法がしばしば採用された。また聖刻文字の場合、升目は表記形式上の単位であって、これが言語上の単位と一致するとは限らない。

<sup>12</sup> 単に縦横の配置ばかりではなく、 という2つの字節の連続を と書くような字節の倒置もしばしば見られる。これは升目を満遍なく埋めようとする審美的な判断に基づく操作であるといえる。



で異なることに注意しなければならない。つまり ①では字節や直線方向の字句が線状性を決定する基本単位となるが、②では字句<sup>13</sup>によって形成される升目の配置方向が書字方向を左右する。一方、③では一見すると統字論の基本単位が得られない。しかしながらナシ象形文字においては視点を変えると統字論の基本単位が得られることになる。というのも、ナシ象形文字では字節や字句が漫画のコマのような矩形のなかに書かれることがあり、そのような矩形の配列が線状性を形成するからである<sup>14</sup>。

### 3.2.2 書字方向

字節（字句）や升目の配列方向が書字方向を形成する大きな要素となるが、それらの書字方向は 横書き型と 縦書き型に二分されうる。後に述べるように実際の文字資料ではさらに多様な方向が確認されているが、本稿では横書きと縦書きの 2 つのみを取り扱うことにする。

最初に本稿で使用する記号について確認する。a から d の記号は書字方向のパターンを示したものである。

- a : 同一方向式
- b : 双方向式（牛耕式）
- c : 天地反転式（倒立牛耕式）
- d : ジグザク式

a はすべての行で同じ書字方向になるもの、b は行ごとに書字方向が入れ替わるもの、c は行ごとに文字の天地が 180 度回転するもの、d はジグザク方向に読んでいくものを示す。

また、右書き（右から左に書いたり改行したりするもの）を 1、左書き（左から右に書いたり改行したりするもの）を 2 で表記する<sup>15</sup>。その際、

<sup>13</sup> ここでいう字句とは 1 升のなかに配置された複数の字節を総称したものである。この定義は福盛・池田（2002：37）の捉え方と異なるかもしれない。

<sup>14</sup> このような意味では矩形内自由配置型という表現が可能かもしれない。

<sup>15</sup> 右書き左書きという用語は誤解を生じさせ易いが、よく使用される名称であるので（屋名池 2003：iii；矢島 1977）、本稿でもこれを採用する。

下から上に書いたり改行したりするものには r を付記して示すことにする。

- 1 : 右書き (右から左に書く / 改行する)
- 2 : 左書き (左から右に書く / 改行する)
- r : 下から上に書く / 改行する

本稿では、横書きにおいても縦書きにおいても、これらのアルファベットと数字を用いている。

次にそれぞれの下位分類について解説する。最初に a : 横書き型であるが、横書きの場合は書字方向が各行で同一となる a : 同一方向式が多い。これはさらに、ヘブライ文字やアラビア文字のような 1 : 右書き、ラテン文字のような 2 : 左書きに分かれる。

また横書きでは b : 双方向式 (牛耕式) の文字もある。この書字法で有名なものはヒッタイト象形文字 (ルイ象形文字) である。ヒッタイト象形文字 (ルイ象形文字) では右書きと左書きを交互に繰り返し、下に向かって改行を施す (大城・吉田 1990 : 203-206)。この際、1 行目が右書きになることが多いように思われるが (たとえば Hawkins 2000 : Pls.92, 272)、左書きのものもある (たとえば Hawkins 2000 : Pls.1, Frag.1, 93)。なお、通常は左縦書きとなる北アメリカのサポテカ文字において、下から上へ改行する横書きの双方向式 (牛耕式) 碑文も存在している (河野他 2001 : 459f)<sup>16</sup>。

さらに横書きには、行ごとに文字の天地が 180 度回転する c : 天地反転式もある。天地反転式は倒立牛耕式とも呼ばれるが、これは双方向式 (牛耕式) とは異なるものである。双方向式 (牛耕式) では文字の天地を変えずに行ごとに右書きと左書きを繰り返す。しかしながら天地反転式では、左右方向の読み方は一定のまま、行ごとに文字の天地を入れ替える。したがって行ごとに画面 (用紙) を 180 度回転させながら文字を書いたり読んだりすることになる。画面を回転させずに書字方向のみを線でたどると

<sup>16</sup> 古代北アラビア文字でも下から上へ改行する横書きの双方向式 (牛耕式) 碑文が存在するという (河野他 2001 : 414f)。

双方向式になることから倒立牛耕式とも称されているが、天地の向きを一定に揃えた場合、天地反転式ではすべての行が同じ方向に読まれる点に注意しなければならない。天地反転式の典型例はイタリア半島に多く見られる。イタリア北部のラエト文字の碑文では 1 行目が右から左に書かれるが、2 行目は下に向かって改行したのち、天地を反転させて右から左に書かれている（河野他 2001 : 1065-1066, 図 3）。イタリア北東部のヴェネト文字では 1 行目を右から左に書き始めるが、こちらは上に向かって改行している（河野他 2001 : 122-123, 図 1, 2）<sup>17</sup>。また、イースター島のラパヌイ文字（ロンゴロンゴ文字）も天地反転式であり、こちらは下から上に改行する左横書きである（河野他 2001 : 1103, 図 1 の注）<sup>18</sup>。

次に d : ジグザグ式について述べる。この書記法はマヤ文字で見られる書字方向である。マヤ文字は字節あるいは字句が升目を形成する。そのような升目を 1 や 2 などの数字で表した場合、次のような書字方向が得られる。

1 2  
3 4

この 1234 の順を一筆書きで書くと Z となることから、このタイプの書字方向をジグザグ式と呼ぶこととした。次に、より実際的なマヤ文字の書字方向の例を示すと、

1 2 7 8 13  
3 4 9 10 14  
5 6 11 12 15

という配置がある（ハウストン 1996 : 82-83 ; 河野他 2001 : 934f）。この

<sup>17</sup> なお、イタリアで見られる天地反転式（倒立牛耕式）の文字に対しては「蛇状犁耕式」という呼称もある（河野他 2001 : 122, 974, 1065, 1147）。

<sup>18</sup> ルーン文字においても下から上に改行する天地反転型の左横書き碑文が存在している（河野他 2001 : 1141, 図 6）。

ような書字方向を本稿で横書きの一種に分類したのは、第1に、2升で改行を施す横書きとして判断したからである。そして第2に、2升で改行を施す横書きが縦方向に連なって1つの段(column)を構成し、1つの画面に複数の段が設けられていると判断したからである。つまり1~6が1つめの段、7~12が2つめの段となる。最後の13~15は画面の幅あるいは碑文の量によって制約を受けたために生じた部分であり、これを1升で改行された横書きの段とみなすことができるであろう<sup>19</sup>。

次に：縦書き型を確認すると、縦書きはa:同一方向式のみとなり、1:右書きと2:左書きに分かれる。ほとんどのものが上から下に書かれるが、しかしながらベルベル文字(ティフナグ文字・リビア文字)では下から上に向かって縦書きされるという<sup>20</sup>。下から上への縦書きが存在するのであれば、縦書きのb:双方向式(牛耕式)という文字体系も考えられうるが、実例が見つからなかった。また、c:天地反転式(倒立牛耕式)やd:ジグザグ式も見つからなかった。

下から上への縦書きに関連することとして、突厥文字の書字方向について触れておかななくてはならない。突厥文字の規範は右横書き(-a-1)であるが、漢字文と突厥文字文を対訳させた碑文において、突厥文字の向きが90度回転したものがある。それらの碑文では、縦長の碑文の表面に漢字が書かれ、そして裏面には、左あるいは右に文字の向きを90度回転させたうえで、突厥文字が記されている(河野他 2001: 673r)。

この突厥文字の向きは英語の書物の背表紙の書字方向と類似している。英語の書物を立てかけた場合、背表紙の文字は90度回転するが、これと同様に突厥文字でも、石版を縦に置いたとき、文字が90度回転するのである。この際、左に90度回転している突厥文字は縦長の石碑の左上の位置から下に向かって文字を読み進めることになる。このとき、読み手は顔を左に90度傾けると読み易くなる。また右に90度回転させたものは、石版を縦長に

<sup>19</sup> とはいうものの、マヤ文字では1升単位の縦書きや横書きの碑文も存在しており、したがって13~15の部分を縦書きとして判断することも可能かもしれない。

<sup>20</sup> ベルベル文字の情報は矢島(1977: 199-200)、河野他(2001: 907r)に依拠している。またGaur(1992: 217)の提示している情報を参照する限り、バタク文字には-a-2と-a-1rの書字方向が認められる。

立てた場合、石碑の右下の位置から上に向かって文字を読み進めることになる。こちらの場合は顔を右に90度傾けると読み易くなる。これら2種類の向きのうち、右に90度回転させた文字について、文字が下から上に書かれていると判断されることがある(藤枝 1971:202; 矢島 1977:199-200; 河野・西田 1995:66)。しかしながら屋名池(2003:6-7)が指摘しているように、文字の向きは正立像(本稿 3.2.3を参照)との関係で決定されなければならない。つまり石版の向きにかかわらず、突厥文字が正立像に対して横方向に配置されているのであれば、それは横書きの碑文として判断されるのである。したがって、左あるいは右に90度回転した突厥文字の碑文は、正立像に対しては横方向に文字が配置されているので、これらを横書きとしてみなすのが妥当だといえる<sup>21</sup>。

以上が書字方向に関する解説である。本稿で設定した横書き型と縦書き型という2分類は代表的な書字方向を示したものであり、実際の文字表記では斜め方向に表記する例や、あるいはファイストスの円盤(河野他 2001:823-826)のように渦巻状に表記する例も見られる。だが、それらは特定の文字体系のなかで規範となる正書法であったようには思われぬ。

「1つの任意変形」(西田 1986:242)と見るのがよいであろう<sup>22</sup>。また、2分類のそれぞれは必ずしも排他的なものではなく、日本語のように1つの文書内で横書きと縦書きを並存させる文字体系もある。さらに、縦書きが横書きに変化したりするなど、統字法が歴史的に変化した文字体系も少な

<sup>21</sup> なお、突厥文字と類似した文字の回転は日本でもおこなわれている。たとえば1869年に編纂された『改正増補 和訳英辞書』では、英単語と日本語の意味が対訳になっているが、日本語の部分は英語の正立像からみると左に90度回転した縦書きになっている(紀田 1994:178)。また現在の日本語の縦書き文書では、英文を和文に取り込む際に英文の文字を右に90度回転させることがある。このような90度回転した英文の文字に対しても、縦書きと横書きの別は、正立像に対して文字がどの方向に配列されているのかという観点から決定されなければならない。

<sup>22</sup> 書字方向を考える際に難しい点は、文字資料に存在するすべてのバリエーションをどのように扱うのかということである。おそらく、多くの文字体系において規範となる書字方向が定まっているものと思われるが、書道などの芸術、広告などの装飾、文字の書かれる材料の形状に基づく制約など、様々な理由から書字方向に任意変形が生じることがある。ここで、言語のラングとパロールにたとえるならば、規範となる書字方向がラングで、様々な任意変形がパロールとなるであろう。

くない。

最後にそれぞれの下位区分に対応する文字の例を挙げておく。

-a-1	アラビア文字、ヘブライ文字
-a-2	ラテン系文字、インド系文字
-b-1/2	ヒッタイト象形文字(ルイ象形文字)
-b-1r	サボテカ文字
-c-1	ラエト文字
-c-1r	ヴェネト文字
-c-2r	ラバヌイ文字
-d-2	マヤ文字
-a-1	漢字系文字(漢字・西夏文字・女真文字)
-a-2	ウイグル系文字(蒙古文字・満州文字)
-a-1r/r2r	ベルベル文字(リビア文字・ティフナグ文字)

### 3.2.3 文字の向き

書字方向の類型化には文字自体の向きを考察することも必要となるが、西田(1986)も犬飼(2002)も正面切ってこれを取り上げてはいない。本稿では文字の向きとして $\alpha$ :固定型、 $\beta$ :反転型の2つを立てた。

$\alpha$ :固定型は日本語の漢字・かな、あるいはラテン文字に見られる文字の向きである。これらの文字では正立像(天地と左右)が定められており、しかも正立像が固定されている。例えば、日本語の文字では横書きにしても縦書きにしても正立像に変化が見られない。また日本語の横書きは、右横書き(-a-1)から左横書き(-a-2)へと変化した。どちらの場合も文字の正立像は同一である。

$\beta$ :反転型は正立像の左右反転が可能な文字である。たとえば、このタイプの文字では右横書き(-a-1)と左横書き(-a-2)とで、正立像の左右が反転される。反転型の文字においては文字の正面と背面を定めることができる。つまり右書きの場合、文字の右側が正面で、左側が背面となる。エジプト聖刻文字、マヤ文字、ヒッタイト象形文字(ルイ象形文字)など、人や動物をかたどった文字では、文字の顔(目・鼻・口のある面)のある

方が正面に配置されることが多い。しかしながら、エジプト聖刻文字を模倣して作られたメロエ文字(メロエ聖刻文字)では、エジプト聖刻文字とは逆に、後頭部の方から目鼻のある方へ向かって読み進める(Crowfoot & Griffith 1911: Pl. XVI, No.1)

### 3.3 小結

上記の分類項目を総合すると、それぞれの文字の統字法を記述することができる。たとえば日本語の文字は「 / -a-2 ~ -a-1 /  $\alpha$ 」ラテン文字(英語)は「 / -a-2 /  $\alpha$ 」ヘブライ文字は「 / -a-1 /  $\alpha$ 」ヒッタイト象形文字は「 / -b-1 ~ -b-2 /  $\beta$ 」となる。このような結果を対照させれば、統字法からみた文字の類型論も可能となる。

## 4 聖刻文字の統字法とそれを規定する力学

3.1の分類案で示すと、エジプトの聖刻文字は「 / -a-1 ~ -a-2 ~ -a-1 ~ -a-2 /  $\beta$ 」という統字法を持つ<sup>23</sup>。このうち -a-1 ~ -a-2 ~ -a-1 ~ -a-2の部分が示していることは、聖刻文字が横書きにも縦書きにも、また右書きにも左書きにも書かれうるということである。しかしながらこのことは、聖刻文字の書字方向が完全に自由であったということの意味しているのではない。それどころか、ある程度の規則や制約が存在していたものと思われる。本章ではこの点について言及する。

### 4.1 規範となる書字方向

現代の日本語は右縦書き -a-1でも左横書き -a-2でも書かれうる。しかしながら規範意識のうえでは右縦書き -a-1が伝統的な書字方向となる。これと同様に、 -a-1 ~ -a-2 ~ -a-1 ~ -a-2というバリエーションを持

<sup>23</sup> 様々な書字法の実例については Grapow (1936: 40-51)を参照。また、カルナク神殿大列柱室の南壁外側にあるシェシエンク王の地名リストの書字方向が -b-1の牛耕式であるとの指摘がある(Mazar 1986: 144)。しかしながら、その書字方向については異論もある(Kitchen 1986: 445)。仮にこれが牛耕式であるとしても、その文字の向きが行ごとに反転していない点が問題となる。

つ聖刻文字にも規範となる方向があり、それは右書きであった。だが、同じ右書きでも、古王国時代（BC 2682-2145年）には右縦書き -a-1 が優勢であったが、遅くとも新王国時代（BC 1550-1070年）には右横書き -a-1 が主流となり、それが民衆エジプト語の時代（BC 7世紀-AD 5世紀頃）まで続いた。この規範意識（-a-1）に関する記述がヘロドトスの『歴史』の中に見られる。

ギリシャ人は文字を書いたり計算をする時、手を左から右に運んでするが、エジプト人は右から左へする。それでいながらエジプト人は、自分たちが右向きに書き、ギリシャ人は左向きに書くのだといっている（ヘロドトス 1971： -184）

このようにヘロドトスはエジプト人の証言する内容に矛盾があるかのような見解を残している。だがこの記述の中に、手の動かし方と文字の向きに関するエジプト人とヘロドトス（ギリシャ人）の認識の違いを見て取ることができる。エジプト人が「右向きに書く」と証言する場合、それは「文字の正面を右向きにする」ことを意味しており、この際、当然ながら「手を右から左へと運ぶ」ことになる。ヘロドトスにとって「手を右から左へと運ぶ」ことは「左向きに書く」ことになるのであろうが、エジプト人は手を動かす方向ではなく、文字の正面の向きを考えていたのである。このような見解の相違は、それぞれの人（々）が使用する文字が反転型か固定型かということに由来しているのかもしれない。

## 4.2 空間配置の力学

4.1 で述べたように聖刻文字では最終的に -a-1 が書字方向の規範となったが、この規範となる向きはステラ（石版）に書かれた勅令碑文に多い。それに対して墓や神殿の壁画やレリーフ（浮き彫り）に見られる文字の向きにおいては、-a-1 ~ -a-2 ~ -a-1 ~ -a-2 が偏りなく見られるように思われる。しかも、1つの画面内に複数の統字法が同時に使用されるのが常態である。このような状況を生み出す理由にはいくつかのものが考えられるが、本稿ではその理由として2つの力学を指摘しておきたい。



1 つめの力学は「デザインとしての左右対称性」である。日本のお札を例にデザインとしての左右対称性を考えると、現在の1000円札では、野口英世が刷られている面の上部の左右の隅に「1000」という数字が配置されている。固定型の向きを持つ日本語の文字では左右とも「1000」となっているが、反転型の聖刻文字であれば、おそらく左側が「0001」、右側が「1000」となるであろう。つまり、中心から縦方向に引いた線を軸に線対称を形成し、左右の部分に文字を反転させて配置させるのである。この結果、左右の文字が鏡像になる<sup>24</sup>。

2 つめの力学は「行為者・受益者対面の原理」である。エジプトの壁画においては、図像と碑文がセットになって特定の場面が示されることが多い。たとえば、狩猟の場面、農耕の場面、供物を捧げる場面などがそれぞれである。その際、行為者と受益者とが対面するように描かれる。たとえば供物を捧げる場面において、供物を捧げる人と捧げられる人とが対面するように配置されているのである。これを行為者・受益者対面の原理と呼びたいと思う。この原理において、人物の図像ばかりでなく、人物に関連した碑文(名前・称号・セリフを記した碑文)の向きも互いに対面することになる。

文字配列の線状性は言語(音声)の持つ線状性を前提としている。だとすれば書字方向に規範が認められるのは、言語との対応を容易にするための工夫であるとも考えられる。しかしながら、視覚に訴え、空間上に一定の位置を占める文字は、言語との対応ばかりでなく、空間配置に関する審美的な側面をも担うことになる。ここに紹介したデザインとしての左右対称性や行為者・受益者対面の原理は、文字あるいは図像を空間に配置させるための力学である。

### 4.3 聖刻文字の実例

最後に聖刻文字の実例を資料で確認する。図1はルクソール東岸にあるカルナク神殿の大列柱室のアーキトレイブ(額縁)に刻まれた碑文である。

---

<sup>24</sup> なお、参考までに述べておくと、見開きの本で左右のページが対称となるようにデザインされたものが、日本語の本にも見られる(屋名池 2003: 152, 図 19-1)。

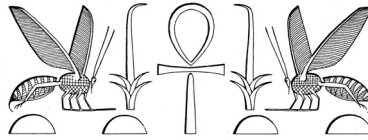


図 1 ( Schwaller de Lubicz 1999 : Fig. 31 より転載 )

図 1 を見てわかるように、文字の配置は左右対称となっている。しかもこの碑文の中心の文字は柱と柱の間に配置されている ( Schwaller de Lubicz 1999 : 573 )。このことから、図 1 にデザインとしての左右対称性という力学が働いているものと判断される<sup>25</sup>。

次に壁画の文字と図像を確認したい。図 2-1 はエジプトのルクソール西岸にある貴族の墓の第 128 号墓の壁面の一部である。この図 2-1 の壁面は図 2-2 のように 3 つの碑文に分割される。碑文(A)の統字法は -a-1、碑文(B)の統字法は -a-1、碑文(C)の統字法は -a-2 である。このように古代エジプトでは 1 つの画面に複数の統字法が用いられうる。

3 種類の碑文で異なる統字法が選択された理由は以下のように推察される。まず碑文(A)であるが、右横書きのこの碑文は規範意識に基づくものと思われる。次に碑文(B)と碑文(C)であるが、これらは互いに向き合っている。互いに向き合う 2 つの碑文にはデザインとしての左右対称性という力学が働いているものと考えられうるが、碑文(B)と碑文(C)にはそれが当てはまらないように思われる。というのも、碑文(B)が 10 行であるのに対して碑文(C)は 6 行のみであり、中心軸が右にずれているからである<sup>26</sup>。ここで注目すべきは、それぞれの碑文の下に人物の図像が描かれており、人物の向きと碑文の向きとが一致しているということである。中心軸のズレと図像の存在を考えると、碑文(B)と碑文(C)の統字法に行為者・受益者対面の原理という力学が働いていると判断するのが妥当であろう。

図 2-1 には 2 人の人物が描かれており、左側の人物の情報が碑文(B)、右側の人物の情報が碑文(C)である。碑文を読むと、左側の人物が墓の被葬者

<sup>25</sup> なお、聖刻文字の左右対称性については Allen ( 2000 : 3-4 ) でも指摘されている。

<sup>26</sup> そもそも図 2-1 は元来の壁面の 1 部を切り取って掲載したものであり、実際の壁面のデザインにおいて、碑文(B)と碑文(C)は左右対称性を示してはいない。

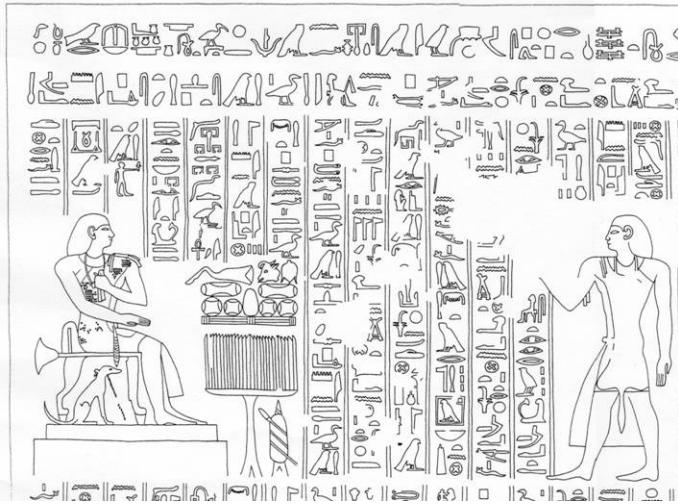


図 2-1

(早稲田大学エジプト学研究所(編)2003: Fig. 117 より一部を抜粋して転載)

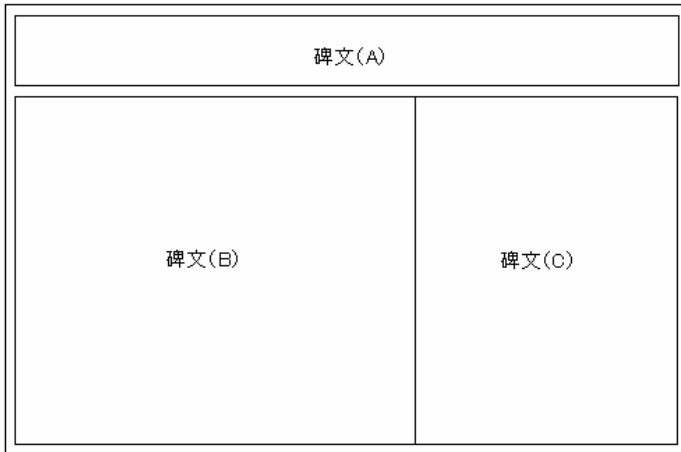


図 2-2 (図 2-1 の碑文分割図)

で、右側の人物が被葬者の息子であることがわかる（早稲田大学エジプト学研究所（編）2003：83-84）。両者のうち、墓の被葬者の方が高い地位にあるが、地位の高い人がいる方を上座、地位の低い人がいる方を下座と呼ぶのであれば、左側が上座で、右側が下座となる。ここで注目したいのは、多くの壁画で上座の図像と碑文が右向き（図像と文字の顔が右を向く）で描かれていることである。つまり、上座の位置にある図像と碑文の向きが規範となる書字方向と一致しているのである。このような特徴はエジプト学ですでに知られており、「右向き優位 (the dominant rightward orientation)」(Fischer 1977：6) と呼ばれている（斎藤 2000：93-99）<sup>27</sup>。この右向き優位の力学は書字方向から生まれたものであるが、重要なのは、その力学が書字方向のみに留まらず、図像の向きにも影響を与えているという点である。

さらにいえば、右向き優位の力学は空間の中に設定された時間の流れにも影響を与えている。たとえば、「死者の書」と呼ばれる巻物においては死者の図像とその文字が右向きで書かれることが多いが、その場合、使者が経験する時間も左から右に向かって流れていくのである<sup>28</sup>。実は、このような状況と類似した内容を屋名池が述べている。

書字方向は、時間的に継起する順序を空間的な配置に置きかえ、一方、空間に配置されたものを時間的な順序に変換するルールだから、いわば空間と時間の変換装置ともいえる。空間的な配置と時間的な継起順を相互に変換することは、文字と言語との関係以外にも、楽譜と音楽、数式と演算、コママンガとそこに描かれたドラマなど、さまざまな所でおこなわれている。[・・・途中省略・・・] 縦書きで右から左へ行が移ってゆく書き方しか知らなかつ

<sup>27</sup> だが、右向き優位の特徴だけでは説明のつかない資料も少なくないので注意が必要である。この点については別稿で論じることにした。

<sup>28</sup> 死者の書において使者が右を向いている場合、死者に関する文章も右書きとなる（つまり文字の正面が右を向く）。通常、右書きの聖刻文字は右から左に読まれるが、死者の書では右書きされていても左から右に読む文章が少なからずある。その理由について本稿の筆者は、死者の進行方向と文字を読む方向を同調させているのではないかと考えている。これについては別稿で論じたいと思う。

た時代の日本人が、空間に時間を感じる時は、その時間は右から左へ動いてゆくものだっただろう。絵巻物は右から左へ展開し、双六（すごろく）のコマは振り出しからまず左へ進み始める。（屋名池 2003：200 [原文では「すごろく」が「双六」のルビとなっているが、引用に際しては技術的な問題から上記の表記に改めた ]）

屋名池の指摘にもあるように右縦書き（右から左に改行）を規範としていた日本では、絵巻の時間順序は右から左に流れてゆく。ところが聖刻文字では文字升を連ねる方向ではなく、文字の向いている向きが空間の中の時間順序に関わっている<sup>29</sup>。つまり、右書きが規範となる聖刻文字では、死者の書などの絵巻において右に向かって時間順序が流れてゆくのである。このように、文字体系によって実現される仕方に違いがあるものの、書字方向を巡る規範意識が空間の中の時間順序に影響を与えていることに関しては、屋名池がすでに見抜いていた通りだといえる。

## 5 おわりに

本稿の目的は聖刻文字の統字論の概要を提示することにあった。だが、個別統字論のみに没頭するのではなく、一般統字論構築の一助として「統字論の射程」と「統辞法の分類案」についても言及した。この「統字論の射程」と「統辞法の分類案」の部分は未だ試案ではあるが、それでも、多くの文字に適用できる分類を念頭において考案したつもりである。

また「聖刻文字の統字法とそれを規定する力学」では、提示した類例が少ないものの、聖刻文字の統字法を理解するための骨格を指摘したつもりである。今後は、屋名池（2003）が日本語の文字でおこなったように、聖刻文字の統字法の具体例を実証的・網羅的に提示することによって、骨格

---

<sup>29</sup> この理由は、聖刻文字の多くが象形の原理で形成された写実的な文字であることに起因しているものと思われる。だが、象形の原理で形成されることの多い聖刻文字において、文字の用法を観察すると表語文字よりも表音文字の方が多い（永井 2005）。このことから、字節の形成法と文字の用法とを分けて考えるべきであることが了解される。

に肉付けをおこなっていきたいと思う。

統字論は地味な分野かもしれないが、書字方向を見定めることなしに未解読文字の解読はできないことからわかるように、書字方向は言語情報を示す重要な要素である。したがって統字論の研究は「好事家の暇つぶしではなく、言語や文字を考える者にとっては小さな問題ではない」(屋名池 2003 : iii) といえるであろう。

### 【参考文献】

- Allen, James P. (2000) *Middle Egyptian: An introduction to the language and culture of hieroglyphs*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crowfoot, John W. and Francis L. Griffith (1911) *The island of Meroë and Meroitic inscriptions*, Archaeological survey of Egypt. London: The Egyptian Exploration Fund.
- Daniel, Peter T. and William Bright (1996) *The world's writing system*. Oxford: Oxford University Press.
- Englund, Gertie (1988) *Middle Egyptian: An introduction*. Stockholm: Tryckeri Balder AB.
- Fischer, Henry G. (1977) *The orientation of hieroglyphs: Part I, Reversals*, Egyptian studies II, New York: The Metropolitan Museum of Art.
- 藤枝晃 (1971) 『文字の文化史』岩波書店。
- 福盛貴弘・池田潤 (2002) 「文字の分類案：一般文字学の構築を目指して」『一般言語学論叢』4・5: 35-58.
- Gaur, Albertine (1992) *A history of writing*, revised edition. London: The British Library.
- Grapow, Hermann (1936) *Sprachliche und schriftliche Formung ägyptischer Texte*. Glückstadt-Hamburg-New York: Verlag J.J. Austin.
- ハウストン・スティーヴン (1996) 『マヤ文字』(大英博物館双書：失われた文字を読む 8) (植田覺訳) 學藝書林。
- Hawkins, John D. (2000) *Corpus of Hieroglyphic Luwian inscription: Vol. 1, Inscriptions of the Iron Age, Part 3*. Berlin-New York: Walter de

Gruyter.

ヘロドトス (1971) 『歴史』 (上) (松平千秋訳) 岩波書店.

犬飼隆 (2002) 『文字表記探求法』 (シリーズ日本語探求法 5) 朝倉書店.

亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) (1996) 『言語学大辞典』 (第6巻術語編) 三省堂.

紀田順一郎 (1994) 『日本語大博物館：悪魔の文字と闘った人々』 ジャストシステム.

Kitchen, Kenneth A. (1986) *The third intermediate period in Egypt (1100-650 B.C.)*. Walminster: Aris & Phillips Ltd.

河野六郎 (1977) 「文字の本質」 『文字』 (岩波講座日本語 8) 1-22. 岩波書店.

・千野栄一・西田龍雄 (編著) (2001) 『言語学大辞典』 (別巻世界文字辞典) 三省堂.

・西田龍雄 (1995) 『文字鼻廩』 三省堂.

Mazar, Benjamin (1986) *The early biblical period: Historical studies*. Jerusalem: Israel Exploration Society.

永井正勝 (2002) 『入門ヒエログリフ』 アケト.

(2005) 「ピラミッド・テキストにおけるエジプト聖刻文字の表記法：語の表記法と文字の用法の分析」 『西南アジア研究』 63: 41-53.

西田龍雄 (1986) 「言葉と文字：文字学」 西田龍雄 (編) 『言語学を学ぶ人のために』 220-254. 世界思想社.

沖森卓也 (2000) 『日本古代の表記と文体』 吉川弘文館.

大城光正・吉田和彦 (1990) 『印欧アナトリア諸語概説』 大学書林.

斎藤久美子 (2000) 「イコノグラフィーからイコノロジーへ」 『エジプト学研究』 8: 83-102.

Schwaller de Lubicz, René A. (1999) *The temple of Karnak*. Vermont: Inner Traditions.

早稲田大学エジプト学研究所 (編) (2003) 『ルクソール西岸岩窟墓〔 〕』 Akht Press.

矢島文夫 (1977) 『文字学のたのしみ』 大修館書店.

屋名池誠 (2003) 『横書き誕生：日本語表記の近代』 岩波書店.

# On the Direction of Egyptian Hieroglyphs: Toward a General Graphosyntax.

Masakatsu NAGAI

The aim of this paper is to discuss the direction of Egyptian hieroglyphs from the point of view of general graphosyntax a branch of the studies of graphemics that deals mainly with the direction of writing.

First, I proposed the following classification of graphosyntax with a view to the world writing systems.

(1) Arrangement of the sign

I: Linear arrangement type [e.g., Latin alphabets]

II: Square arrangement type [e.g., Egyptian hieroglyphs]

III: Free arrangement type [e.g., Tompa characters]

(2) The direction of the writing

: Horizontal writing

a: One-way direction type

1: From right to left, and top to bottom [e.g., Hebrew]

2: From left to right, and top to bottom [e.g., Latin alphabets]

b: Boustrophedon type

1: The first line is from right to left, and writes toward the bottom  
[e.g., Hittite hieroglyphic Luwian]

2: The first line is from left to right, and writes toward the bottom  
[e.g., Hittite hieroglyphic Luwian]

1r: The first line is from right to left, and writes toward the top  
[e.g., Zapotec writing]

c: Inverse Boustrophedon type

1: The first line is from right to left, and writes toward the bottom



[e.g., Raetic alphabet]

2: The first line is from left to right, and writes toward the bottom  
[not attested]

1r: The first line is from right to left, and writes toward the top  
[e.g., Venetic alphabet]

2r: The first line is from left to right, and writes toward the top  
[e.g., Rongorongongo]

d: Zigzag type

1: From right to left [e.g., Mayan hieroglyphs (but not standard)]

2: From left to right [e.g., Mayan hieroglyphs]

: Vertical writing

a: One-way direction type

1: From top to bottom, and right to left [e.g., Chinese characters]

2: From top to bottom, and left to right [e.g., Uighur]

1r: From bottom to top, and right to left

[e.g., Some texts of Berber, Tifinagh]

2r: From bottom to top, and left to right

[e.g., Some texts of Berber, Tifinagh]

(3) The direction of the face of the sign

: Fixed type [e.g., Latin alphabets]

: Mirror reversal type [e.g., Egyptian hieroglyphs]

Second, I discussed the graphosyntax of Egyptian hieroglyphs and pointed out that it has (1) II / (2) -a-1 ~ -a-2 ~ -a-1 ~ -a-2 / (3) types, but that its normative direction is -a-1, that symmetrical dynamics also work in the Hieroglyphic writing system in some cases [Fig. 1], and that the signs face same direction as the face of the figure to which they refer [Fig. 2-1].

*Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science/*

*Ph. D. Student, University of Tsukuba*

*1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan*

*E-mail: mntcabe@rc5.so-net.ne.jp*